

(3) プロテスタント教会の場合

ブラジルではプロテスタント教会が伸展している (Vol. 14 No.11、No.12 参照)。とはいえ、ブラジル地理統計院の 2010 年調査でカトリック信者 65% に対してプロテスタント信者が 22% だと聞けば、読者はカトリックが依然優勢だと想起するだろう。しかし、日曜日のミサへの参加や諸聖人に信仰を捧げる信者の割合はおそらく全体の 3 分の 1 だろうと言われており、とすれば実質的な信者は 2 割を切ることになる。ゆえに、プロテスタントの信者数はカトリックに匹敵するか、それを上回るほどの勢力になっていることがわかる。

それでもブラジルが一般的にカトリックの国だと語られることは変わらない。プロテスタント人口の増加は 1980 年代からの兆候で、現在信者だという人の中にはたとえ名目的でも元はカトリック信者だったという人が多い。そのような環境にあるからこそ、プロテスタント信者が自らをクレンチ (信者) と自称するとき、それが「正真正銘の信者」と言わんばかりの強固なアイデンティティを示すことになるのは当然と言える。よってプロテスタント信者が他の宗教に改宗しにくいことは容易に理解されよう。

筆者の調査でもプロテスタント教会から天理教に改宗している人は非常に限られている。ここではカトリックからプロテスタントを経由して天理教に改宗した女性の事例を取り上げよう。

カトリック文化とスティグマ

エリアナは 1986 年に天理教に改宗した。それはカトリックからアセンブレイア・デ・デウスに足を運びだして少し経った頃だった。アセンブレイアはブラジルのプロテスタント教会のなかで最も古く、信者数は最も多い。彼女の母はカトリック信者で、父はエホバの証人の信者だった。

彼女が宗教を変えることになったきっかけは自身の離婚だった。カトリック的な文脈において離婚とは、以下で述べるように特に女性にとってスティグマの原因となる。彼女の他宗教への改宗は、スティグマからの解放という意味を持っていた。

20 世紀に入ってからブラジルはもとよりラテンアメリカ諸国では世俗化が進み、婚姻も国家が管理するようになった。とはいえ、たとえば現行のブラジル連邦共和国憲法第 226 条では、婚姻は民事婚だけでなく、宗教婚も法律の規定に従って民事の効力を有するとされており、依然として婚姻における宗教の占める位置が重んじられていることがわかる。また、ラテンアメリカ諸国では 1970 年代初頭まで離婚制度を持たない国が多く、ブラジルで採用されたのは 1977 年である (奥山 1992: 168)。離婚に不寛容の立場をとるカトリック文化の影響が見て取れる。

カトリック教会では、神の前で永遠の愛を誓った二人は「神の結び給いしもの」であり、俗人が人為的に「これを分かち」こと、すなわち離婚は神にたいする冒瀆だと考えられてきた。また、教会法では婚姻は秘蹟 (サクラメント) であり、夫婦は「一体」で「非解消」であるとされてきた (奥山 1992: 159)。よってカトリック文化に身を置く限り、離婚した者はスティグマを負わされることになる。

さらに、ラテンアメリカ社会には男性性が過度に誇張されるマチズムがある。マチズムでは、妻は夫に対して従順であることが美德とされる。マチズムも、聖母マリアへの信仰というカ

トリック文化に支えられている。というのも、聖母マリアが従順な女性の象徴として位置づけられ、女性は聖母のようであることが望ましいとされるからである。こうしたマチズムと表裏一体のジェンダー規範をマリアニズムと呼ぶ。

大平健はペルーの貧民街の事例調査を通じて、マリアニズムを体現する女性を処女懐胎の聖母マリアに自らをなぞらえる「聖母たち」と論じる (大平 1986: 68)。エリアナの別れた夫は酒を飲むと彼女に暴力を振るった。それに耐えていた間は、彼女も大平が呼ぶところの「聖母たち」の一人でありえた。しかし、彼女は「聖母」になり切れなかった。その結果、エリアナは婚姻を秘蹟とするカトリック規範とジェンダー規範から二重の意味で逸脱し、別れた夫よりも大きなスティグマを背負うことになったのである。彼女がカトリック以外の宗教に居場所を求めたのは当然だったといえる。

プロテスタント教会への改宗

では、プロテスタント教会に通うようになってからはどうだったのだろう。教会では身なりを良くして行かなければ誰も相手にはしてくれず、そこでも居場所が得られなかったという。むしろ、どのプロテスタント教会でも風貌の良さを要求するわけではない。そもそも信者指導や教会運営の在り方は牧師に任されているからだ。とはいえ、以前は多くの教会で女性はロングヘアーでスカート、男性はスーツにネクタイと決められていた。近年ではそのようなドレスコードはだいぶ緩んでいる。なお、アセンブレイア・デ・デウスには、マドウレイラ、ベレン、そしてサントスといった代表的な会派があり、国内の教会はそれらの大きな会派に繋がっていることが多い。しかし、今日では単立の教会もたくさん生まれている。

エリアナの語りには、「愛」や「つながり」が強調される。彼女は疎外感や孤独感から新たな宗教を求めようになったとみられるが、アセンブレイアでも置き去りにされた気持ちは変わらなかった。

彼女の「つながり」への志向は、ラテンアメリカの都市問題を反映したものである。彼女の家は、低所得者層が不法占拠によって住宅を増やした地区にある。住民の多くは暮らし向きが良いとはいえず、毎日のように狭い路上でトランプに興じている失業者の姿が窺える。そうした住人に対して、彼女は「近所には仲のいい人なんかいないし、信用もできない」と語る。

天理教への入信

天理教は知人に紹介された。入信後、離婚後の不安を解消させたいと望んでいたところ、布教師からそもそもの問題の種をなくすことが大切だと言われた。そこで教義講習会と修養会に参加し、仲が悪かった祖父母と同様の「いんねん」が自分にもあると理解するようになった。その後、別れた夫を非難してきたことを反省し、まずは自分を顧みるようになったという。エリアナは、「いんねん」の教えによる自己省察と、「互い立て合いたすけ合い」という教えによって、教会での家族のようなつながりの中で自らが依拠しうる場所を見出したのだった。

【参考文献】

- 大平健『貧困の精神病理』岩波書店、1986 年
奥山恭子「家族と国家—法制度からみたラテンアメリカの家族」『ラテンアメリカ 家族と社会』三田千代子・奥山恭子編、新評論、1992 年